小さな幸せはやさしい日溜りの中で（CLANNAD）

如月奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さな幸せはやさしい日溜りの中で（ＣＬＡＮＮＡＤ）

【Ｎコード】
Ｎ０１２８Ｚ

【作者名】
如月奏

【あらすじ】
来週末に控えたクリスマスイブ。岡崎朋也は娘の汐と共に妻の渚の誕生日を祝うサプライズパーティを開くことにしたのだが……。

十二月（前書き）

はじめに（一一）

拙作はＫｅｙ作品「ＣＬＡＮＮＡＤ」の二次創作小説です。ゲーム版の「渚Ｔｒｕｅ　Ｅｎｄ」後のお話として書かせていただきます。以下の二項目のうち少なくとも一項目以上を満たしていることを推奨しますが、満たさなくても内容をある程度理解できるようには執筆しております。ただし、その場合には多少のネタバレがあることをご了承願います。

●ゲーム版「ＣＬＡＮＮＡＤ」の「渚Ｔｒｕｅ　Ｅｎｄ」および「汐Ｅｎｄ」をむかえた。

●アニメ「ＣＬＡＮＮＡＤ」および「ＣＬＡＮＮＡＤ　ＡＦＴＥＲ　ＳＴＯＲＹ」を最後まで視聴した。

十二月

風も冷たく感じるようになった十二月。俺はいつものように同僚の芳野さんと一緒に、イルミネーションが展開されている街の中を奔走していた。決して大規模とはいえない工事会社勤めであるから、仕事量も割と多い。しかし、俺は高校を卒業してこの仕事についてから、なんとかやり続けることができている。厳しく言われることも多かったし、失敗も多かった。挫けそうになることもあった。それでも頑張ることができたのは、大切な守るべき家族があったからだ。

来週末の二十四日は、世間一般ではクリスマスイブとか言われてもてはやされるのが常であるのだが、俺にとってはそれ以上に重要な日であった。そう、俺の妻である岡崎渚の誕生日。娘の汐と、一緒にパーティを開いて祝うことを約束しているのだ。

しかし、ただのパーティにするつもりはない。これは汐の発案だった。

「さぷらいずにする！」

汐の幼稚園の教員、藤林杏にでも何か言われたのだろうか。小さい子は大人の言葉を聞いて育つというからな。しかし、こういうのも悪くない……と俺も乗ったわけであるが……。

いざ考えてみると、いろいろサプライズにするには問題もあることに気付かされた。しかし、何よりも一番の問題となるのが、だんご大家族のぬいぐるみをプレゼントしてきた。だが、このぬいぐるみ、何と言ってももう生産中止されている代物である。おもちゃ屋に行って

「だんご大家族ありますか？」

と聞いても、どこぞのみたらし団子屋のごとく数分で手渡ししてくれるようなことはまずないといって良いだろう。生憎様、もう既

に何軒もおもちゃ屋を回っているが、良い話は一度も聞けなかった。
「岡崎、どうかしたか？　心ここにあらずという感じだったぞ」
同僚の芳野さんが俺に聞いてきた。ちなみに芳野さんにも公子さんという妻がいて、その公子さんは渚の高校時代の美術の先生で、渚の母の早苗さんとも仲が良いという不思議なつながりがある。
「え……そ、そんなことないっすよ」
「む……そうか？」
芳野さんは訝しげに俺の方を見ていたが、ため息を一つついて立ち上がった。
「何かあったら言えよ。お前のしょげている顔を見ていて、一番悲しむのは誰だ？」
真剣な表情で言う芳野さん。
「え？」
「お前を愛する人……渚さんに決まっているだろう！　世界がどんなに崩壊しようとも、君だけは愛していたい……とそう思ったのなら、お前はそんな風にしょげていてはいけないはずだ！」
握り拳を作りながら力説する芳野さん。
「……」
「全ての中で最も大切なもの……そう、それが愛だ」
芳野さんはかつては元ロックミュージシャンで、ラブソングなども多く歌っていた。だから、このように愛について語り出すと、とても熱い。
なお、余談であるが、引退後しばらくは、歌うこともしなくなっていたようだが、ある一件を機に仕事の昼休憩の間にギター演奏を同僚に聞かせてくれたりするようになっている。俺もその演奏が好きだ。
「さて、仕事再開だ。年末が近いから仕事もやや多めだ。気合を入れていくぞ」
「は、はい！」
仕事が終わった頃には、空も暗くなってしまっていた。俺は芳野

さんの携帯電話を借りて渚に遅くなることを伝え、街のある場所に向かった。

おもちゃ屋にて

この近辺のおもちゃ屋で唯一訪れていなかった場所があったのだ。諸理由から、出来ればこの店にお世話になるのは嫌だったのだが、緊急事態ということだから仕方がない。

「ＳＨＩＲＡＨＯ」という名の店だった。もう今日は閉店するつもりだろうか。暗いのに明かりさえ点いていなかったが、幸いにもシャッターは閉まっていない。間に合ったようだ。

「はあ……」

前にここを訪ねた時は、酷い目に遭った。まずライトセイバーもどきで脳天を叩き割られた。それから、ベンガルオオトカゲのトカーゲ君とかいうブツをオッサンのために用意していた。何ともまともな店のようには思えないのだ。だから、本当に来たくなかったのだが。

「ちーっす」

店内に入るも、人影は見えない。本当にやっているのかと疑いたくなるぐらいだ。すると、その時である。店の奥に棒のような黄色の光が灯った。俺は咄嗟に身構える。

「はーっ、とうっ！」

ライトセイバーもどきから身を守るため、俺は頭の上に手をかざした。前と同じ手は通用しない。そう高をくくっていたのだが……。

「ぐぉぉっ！」

面ではなく胴だった。

「なんじゃ、前からちっとも進歩しとらんじゃないか」

やっと電気がついた。頭が輝いている爺さんがため息をつきながら、ライトセイバーもどきの剣先をしまう。

「俺はそんな遊び、やりたくもねえよ！」

「はっはっはっ、そうか」

高笑いする爺さん。やはり苦手な相手なのかもしれない。

「さて、何か御用かね？」
「あ……あの、探し物があるんですが」
俺は聞いた。
「天使の人形なら遥か北の地の森の近くに埋まっとるわい」
「なんでそうなる！」
退店してやろうかと本気で思ったが、一応聞いてみることにした。
「だんご……大家族の……ぬいぐるみです。どんなやつでもいいんですけど……もう生産中止になっているので、どこにもなくて」
「だんご大家族？　はっはっはっ、お前そんな趣味があるのかい。いやあ、人は見かけによらないとは言うが……」
嫌らしい笑みを浮かべる爺さん。もう嫌だ、この店……。
「……まあ、うちにはないんだがな……確かわしの知り合いの店には置いてあったような……いや、なかったような……」
どっちだよ。
「確認してもらえませんか？」
「なんでお前のためにそんなことせにゃならん！　わしはお前の悪趣味に付き合うつもりなんかないわい！」
「んだとお！」
なんという人だ。俺は諦めて帰ろうと思いかけていたが、爺さんが俺の肩を掴んでじっと見つめていた。
「なんだ？」
「ただ、条件付きでなら確認してやらなくもない」
「条件？」
よく分からないが、一応爺さんなりの譲歩らしい。俺は傾聴することにした。
「明日、秋生君を連れてきてくれ。最近遊びに来てくれんで寂しくての……」
「は？」
意味不明だった。しかし、条件としては想像していた以上に軽いものであった。

「……最初から確認ぐらいはしてやる気じゃ。でも、それだけじゃつまらんからの」
なんという……。まあ、悪い人ではないということにしておいてやろう。
「頼む。わしの一生涯の願いじゃ」
ちっぽけな願いだった。小銭を求めるぐらいにちっぽけだった。
「分かったよ。明日だな。もしオッサンがダメって言ったら、どうする？」
「じゃあ、確認してやらなーい」
「おい」
意外と子供のような人であった。
「あ、あと、絶対にあるとは限らんからな……期待し過ぎは禁物じゃぞ。変な人」
どこかで言われたような気がそこはかとなくする呼び名だった。

渚

家に帰る頃には、もう九時を過ぎていた。玄関をくぐると、愛する人の影。
「おかえりなさい」
「ただいま。遅くなってごめんな」
「いえ、いいんですよ」
渚はそう言ってにっこり笑った。温かい笑顔が俺の心を優しく撫でてくれる。
「それより……」
渚の足元にぴったりとくっついていた汐が俺の方に駆け出した。そして、俺のズボンの裾をぎゅっと掴む。
「おかえりなさい、パパ」
「しおちゃんが寂しがってたんですよ。パパは帰ってこないの……って」
「そうだったか」
俺は汐の小さな体を持ち上げて、高い高いしてやる。汐は嬉しそうにはしゃいだ。
「やれやれ、一日帰りが遅いぐらいで……汐は甘えん坊だな。よおし、それじゃ、今日はパパがトランプの相手をしてやろう。そうだな……七並べはどうだ？」
「やる！」
元気の良い返事。
「朋也さん、晩ご飯は？」
「あ、まだだ」
俺が言うと同時に、腹の虫が音を立てた。クスクスと笑い声。
「そうだと思いました。温め直してきますね」
渚はそう言ってまた笑うと、足早に台所の方に向かった。俺はさっさと着替えを済ませ、準備が整うまで汐と戯れていた。

「ほう、それは誰のバッティングフォームだ？　駒田か？」
「ちがう。パパのフォーム」
「そうか。それじゃ、オッサンの球でもホームランにできるな」
俺が聞くと、汐は懸命に首を振って否定した。
「あっきーがいってた。そのフォームだとピッチャーがえししかうてないって」
「なあにぃ！」
オッサンからホームランを何本打ってきたと思ってるんだ。全く……。
俺は汐の前に座り込むと、小さな肩を持ちながら
「悪いけどな、汐。それは嘘だ？」
と言った。
「うそ？」
首を傾げる汐。
「ああ、嘘だ」
俺が言うと、汐は難しそうな顔をして畳の上に座り込んだ。
「きょうせんせい、うそはいけないっていってた。だから、あっきー、いけないこ」
「そうだ、いけない子だ。だから、今度出会ったらお仕置きだな。どんなお仕置きをするか考えておけよ」
「うん」
そうしていると、渚のお呼びだ。俺が食卓に向かうと、汐も付いて来た。俺にぴったりとくっついて、離そうとしない。
「ん、汐。お前はあっちで遊んでいていいんだぞ。パパもすぐに食べて行ってやるから」
俺が言うと、汐は首を振って椅子の上に座った。よく見ると、汐の前にも晩ご飯が並べてある。
「しおちゃん、パパが帰ってくるまで食べないって言って聞かなかったんですよ」
渚が困ったように言うと、汐は元気よく頷いた。そんな汐に猛烈

に感動している俺は、渚が言うようにオッサンみたいな人間であり、杏が言うように典型的な親バカなのであろうか。だが、そんなことも構わない。

「そうか。ありがとな、汐」

「どういたしまして」

こんな幸せな家族の輪の中に、俺も入ることができて、そして、笑っていられる。昔は考えもしなかったような今のこの瞬間を、俺は満喫していた。

ナベ？　いいえ、ボタンです

翌朝の土曜日、俺はおもちゃ屋の爺さんの約束に従い、古河パンに向かうことにしていた。起きて窓を開けると、暖かい日差しが差し込んできた。青空に浮かぶ太陽の輝きは、三人で過ごした菜の花畑を想起させるほどに眩かった。

「おはようございます、朋也さん。今日もいい天気ですね」

エプロン姿の渚が聞いてきた。台所から味噌汁の美味しそうな匂いが漂ってくる。

「ああ、そうだな。こんないい天気だと、お出かけしたくなるな」

「そうですね。でも、今日はわたし、用事があっていけないんです。しおちゃんと二人で楽しんできてください」

渚は残念そうに笑って、外を見つめている。俺は彼女の頭の上にそっと手を乗せると

「そうか。それじゃ、明日は三人でお出かけだ。ちょっと電車に乗って隣町にでも行こう」

と言った。渚は目を丸くして俺の方を見ていたが、やがてにっこりして頷いた。

「はい！」

朝食後、俺は汐を連れてマンションを出た。

「汐、あんまりはしゃぎすぎてコケるなよ」

ぽかぽかのおでかけ日和とはまさに今日のような日をいうのだろう。十二月に入ってから寒い日が続いていたこともあり、汐はいつになく元気いっぱいだった。

「だいじょうぶ」

そう言う矢先から、つまずきそうになる汐。俺は咄嗟に汐の体を支えてやった。

「ほら、言わんこっちゃない」

「うん……」
しょぼんとする汐。俺は屈み込んで汐の目を見ながら
「でも、本当にいい天気だ。今日はあっきーといっぱい遊ぼうな」
と言うと、笑顔を取り戻し、大きく頷いた。
「よしよし」
俺が汐の頭を撫でていると、汐は突然前を指差して叫んだ。
「あっ、ナベ！」
前方には巨大な猪。どこかで見たことがあるような……というのは冗談で、杏のペットのボタンである。昔は手のひらサイズのペットで、いつも杏に会うために高校にやってきていたものだ。
なお、なぜ汐がこいつを「ナベ」と呼んでいるか、詳しいことはよく知らないが、どうやらオッサンの仕業らしい。しかし、なんだかんだ言って、こいつはオッサンに懐いているみたいだが。
「ナベー」
ナベ……いや、ボタンの上に乗って、汐は遊び始めた。さて、ボタンがここにいるということは、おおよそあいつも近くにいるということだろう。
「あら、朋也じゃない」
ほら、案の定だ。
「おはよう、杏」
「うん、おはよう。今日は汐ちゃんとおでかけ？」
「ああ。ちょっとオッサンに会いにな」
「ふーん……」
杏は汐の方をちらりと見ながら笑うと、俺の肩の上に手をおいて
「楽しんできなさいよね。この年頃の子は、いろいろな体験をして育つのよ」
と言った。
「ほお……なんか柄にもないことを」
からかう俺の前で握り拳を作る杏。しかし、すぐに力を抜いて苦笑いした。

「はあ、それはどうも悪うございました。一応あたしも教員なのよ」
「辞書は飛んでこないのか」
「いつの話よ」
杏は懐かしむようにやわらかな口調で言う。そして、ボタンのそばに寄って俺の方を向いた。
「……でも、今となってはそれもいい想い出……か……」
「……ああ、そうだな」
二人顔を見合わせて笑う。時の流れは止まることがない。杏もまた、あの頃から随分と変わった。しかし、それでも、杏と……みんなと共有した時間は今も心の中に刻まれている。あんなに嫌いだった高校生活も、今では一緒に笑い合える「いい」想い出になっていた。
「さてと……それじゃ、あたしは帰るわね」
「ん？　ボタンを散歩に連れ出していたんじゃないのか？」
俺が聞くと、杏は呆れたように小さくため息をつくと、
「なんかね、急に飛び出して行っちゃったのよ。たぶん、汐ちゃんが近くにいると思ったのね」
と呟いた。
「そうか」
俺はそう返し、汐に呼びかける。
「そろそろ行くぞ」
「うん！」
元気よい返事とともに、汐が俺のもとに駆け寄ってきた。ボタンは心なしか残念そうだ。
「じゃ、またな」
「きょうせんせい、ばいばい」
「バイバイ。また月曜日に会おうね、汐ちゃん」
「うん」
杏は汐の前に屈み込んで頭をなでなですると、ボタンは引き連れて、立ち上がった。

「朋也も、またね」
「ああ」
向こうの角を折れる杏を見送り、また汐を歩みを進めていく。十分ほど経っただろうか。前方から一人の女性が泣きながら飛び出してくるのを目にすることとなる。俺は汐と顔を合わせ、小さくため息を漏らした。

おもちゃ屋にて？

昨日のおもちゃ屋に行くと、待ちくたびれたかのような表情で爺さんが出迎えてくれた。
「おお、秋生くん。一週間ぶりじゃの」
「ああ、そうだな」
「は？」
一週間ぶりだと……。いや、突っ込むまい。相手は爺さんだ。ご老人は労るべしと言うではないか。あ、でも、いつかしらにお婆さんのお手伝いをしようとして威嚇されたようなことがあったような……いや、気のせいだ。
「おや、そこの子は？」
爺さんは俺の隣にいた汐を見つけて屈み込んだ。
「俺の娘だ」
オッサンが即答する。いや、違うから。
「はて、そうじゃったかの？」
「いや、俺の娘だから」
俺が説明すると、爺さんは口をあんぐり開けて俺の方を見つめてきた。そこまで驚くことか？
「……そうじゃったか。娘さんのためのプレゼントじゃったのか。それならそうと言ってくれれば良いものを」
今の今まで、だんご大家族収集が俺の趣味だと誤認されていたらしい。しかし、爺さんの解釈が未だに間違っていることを彼は決して気づいてはいないだろう。
「水曜日にこちらに届くよう発送してくれるらしい。ちょっと時間がかかるがそれでもいいかの？」
爺さんが俺の耳元で囁く。
「ああ。ありがとう……ございます」
爺さんはポンポンと俺の頭を軽く叩くと、ズボンのポケットから

何かを取り出すと、ボタンを押した。黄色に光る剣先が展開し、そのまま爺さんはオッサンの方にかかっていく。
「かたじけのうござる！」
オッサン、キッとした目付きで爺さんを睨むと、ピンク色に光る剣ですかさず攻撃を防ぐ。そして、そのまま反撃！
「あの、汐も遊べるような遊びにしてくれないか？」
二人は息を合わせたように俺の方を向いた。そして、二人ともほぼ同時に相手の頭を剣で叩く。
「ぐぉぉ」
「ぬぉぉぉ」
馬鹿ふたりの絶叫が静かな街に響き渡った。

「そうじゃのう……」
頭をさすりながら、爺さんは店の裏に入っていく。汐はその先をじーっと見つめている。
「たまには子供に合わせた遊びも悪くないな」
オッサンが言う。
「ああ、悪くないぜ」
野球が汐に合っていないということは自覚していたのか。まあ、汐も楽しんでいることだし、俺は止めないが。
しばらくして、爺さんが木製の独楽を四つ持って戻ってきた。
「おお、懐かしいな。なあ、朋也」
「そうだな」
流石はおもちゃ屋というべきか。しかし、汐は回し方を知っているだろうか。最近は保育園や幼稚園で独楽遊びをすることもなくなってきていると聞く。
「こま」
「回し方、分かるか？」
俺が汐と同じ高さまで屈んで聞くと、力強く頷いた。
「だいじょうぶ」

「そうか、それならやってみるか」
爺さんの案内で、おもちゃ屋の奥に入り、こたつを取り囲んで独楽回しを興じることとした。
「せーのでっ！」
紐を使って四人一斉に独楽を回す。すると、オッサンの放った独楽が爺さんの放った独楽とぶつかり合って共倒れになった。
「お前！　なんでわしの独楽を狙うんじゃ！」
「爺さんこそ、俺の独楽を狙うな！」
大人二人、口論中。結局二人が一番子供なんだよな、たぶん。
「汐の独楽、よく回ってるじゃないか？」
「パパのも」
父子二人でじーっと見つめていたが、やがて汐の独楽の方が少しだけ回りが悪くなってきた。
「あ……」
「汐、そういう時は応援だ。がんばれーって応援するんだ」
「うん！　がんばれー」
子供……いや、大人二人がこたつの中に戻ってきた。
「お、いい感じじゃねえか」
「秋生くん、こういう時こそいたずらじゃな」
爺さんが笑って言った。オッサンもまた笑って頷く。
「こら、やめろ。今いいところなんだ」
「分かってるっつーの。小僧の独楽がコケるように祈願してやる」
「それもやめろ」
結局二つの独楽はほぼ同時に回転を止めた。少し残念そうに、だが満足そうにも笑う汐の頭をなでなでしてやる。
それから、双六をしたり福笑いをしたりして、少し早い正月遊びを楽しんだ。結局オッサンも爺さんも楽しんでいた。だが、一番楽しんでいたのは間違いなく汐だろう。俺の隣でずっとはしゃいでいたのだ。そして、俺自身もそんな汐の姿を微笑ましく思っていた。

風の少女

爺さんと別れ、おもちゃ屋をあとにすると、俺たちは古河パンに戻ることにした。オッサンとはそこで別れた。早苗さんには

「昼食を一緒にされてはいかがですか？」

と誘われたが、もしかしたら渚が家に帰っているかもしれないので、少々後ろめたい気持ちになりながらも断ることにした。

「汐、お腹すいたか？」

「うん、ちょっとだけ」

元気よく返事する汐を見て、俺は心が暖かくなった。少しだけ足を速めると、汐も少しだけ足を速めて頑張ってついてくる。そんなひたむきな姿がこの上なく愛しい。

「お？」

しばらく歩くと、俺は見知った人の後ろ姿を見つけた。

「風子か？」

「うん」

俺は汐の手を引いて、やや背が低めの少女のもとに向かう。

「風子、久しぶりだな」

そう言って、俺はすかさず風子の両目を手で覆ってやる。慌てだす風子。

「わわ、こんなことをするのはどこの岡崎さんですか！？」

俺の手を払いのけて飛び退くと、攻撃的な口調で言う。しかし、どこの岡崎さんって……わけがわからない。

「あ、朋也さんな方の岡崎さんですか」

「意味不明だ」

俺の答えを無視して、風子はてくてくと餌に釣られた魚のように、汐の方に歩いていった。こいつも余計なことを言わなければ、なかなかかわいいとは思うのだが。

「汐ちゃんはパパとお出かけですか？」

「うん」
認めてしまうのもあれだが、風子と汐はかなり仲が良い。風子は汐のことを心底かわいがってくれているし、汐も風子を慕っていることは間違いないのだ。
「それじゃ、汐ちゃんは風子の家に行きましょう」
ただ、しばしば汐を連れ去ろうとすることがあるので、目を離せない。
「汐は俺たちの娘だ。誘拐するなよ」
「誘拐なんて人聞き悪いですね！　風子は大人ですから、そんな大人げないことは決してしません」
汐の手を固く握り締めながら反論されても、今ひとつ説得力がないのは当然のことだろう。
「ゆーかい、されるの？
「全く……汐が勘違いするだろ。大丈夫だぞー、汐」
俺は屈み込んで、汐をそっと抱きしめてやる。
「……岡崎さんが汐ちゃんのことを好きで好きで仕方が無いという気持ちはよく分かります。ですが、ここは一つ風子の子育て能力に賭けてみてはいかがですか？」
懸命に言う風子。
「お前に任せたら、すごい捻くれ者に育ちそうだな」
俺の言葉に風子は頬を膨らませる。
「岡崎さん、ぷち最悪です！」
「最悪ってな……」
「ぷちをつけただけでもマシだと思ってください」
最悪に「ぷち」をつけても、大して変わらないように聞こえるのは気のせいではあるまい。
「分かった分かった」
「ようやく岡崎さんも汐ちゃんを風子にくれる決断をされたのですね」
「んなわけあるか！」

風子と話していると、どうしてか途中から風子に強引に話を進められていく気がそこはかとなくする。
「岡崎さんは頑固です」
「頑固で悪かったな」
風子がぷいと顔を背けるとほぼ同時に、誰かの腹の虫が鳴いた。
「お前か？」
風子に問いかけると、ぶんぶん首を振って否定した。俺ではない。そうなると……。俺たちは汐の方に目を向けた。
「……もしかして汐ちゃん、我慢してたんですか？」
風子が優しい声で尋ねると、汐は大きく首を振る。しかし、体は正直だ。また、腹の虫が鳴いた。
「んー、そうでしたか。それじゃ、仕方ありません。あいにく、風子はもうお昼を済ませてきてしまいました。ですので、岡崎さん。あなたにお任せしたいと思います」
汐はほんのりと頬を赤らめている。俺は汐の頭を優しく撫でながら、
「それじゃ、さっさと帰るか」
と呼びかけた。汐は小さく頷く。
「汐ちゃん、明日また連れて帰りに来ますから、それまで待っていてください。では」
風子は汐と目の高さを合わせて、子供をあやすような口調で言うと、風のように走り去っていった。
「やれやれ……本当に変なやつだよなあ」
「でも、ふうこおねぇちゃん、いい人」
汐の一言が耳に入っていれば、風子はまた風のように俺たちのもとに戻ってきていたかもしれない。そんなことを思いながら、俺たちは帰路を急いだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0128z/

小さな幸せはやさしい日溜りの中で（CLANNAD）

2011年12月15日02時45分発行